

手 ゆたしの

作り手に聞く

一級造園施工管理技士

玉井麻子さん
(ゴバイミドリ)



「第2の手ってなんだろう」。同僚に聞いたら「色えんぴつ」と返された。植物の暮らし方と庭の将来像をいかにゆたかに伝えられるか。思いを込めて色を添える。

お生まれは？

北海道の苫小牧です。幼少の頃に神奈川県厚木市へ越し、田んぼや川が残る環境で育ちました。初めて親にねだって買ってもらった本は高山植物の図鑑。足元の野草とか、派手なものよりもそこで一生懸命に生きている植物に魅力を感じたようです。自然を生かす手仕事をと、高校卒業の進路相談の時には、伝統工芸を志したいと思うようになりました。

なぜ伝統工芸に憧れを。

工業製品はない手仕事の美しさ、人の手の成せる技に惹かれていたのだと思います。結局悩んだ末に、農学部の緑地学科へ進むことになりました。学生生活の傍ら、大好きな喫茶店に頼み込んでアルバイトをしたんですが、そこで体験した、季節のものを食べたり加工したりということが、自分の中の「当たり前」になっていきました。食を基本とし、伝統工芸への思いも胸に「将来は手を動かせる仕事を」と考えた時に、緑や自然に関わることを仕事にしようと思ったんです。

今はどのようなお仕事を？

里山と都市を結ぶ緑化事業体「ゴバイミドリ」で、プランニングをしています。住む人が部屋の中から見る風景をイメージしながら検討します。リビングのソファでくつろいでいる時やキッチンでのお料理中、朝目覚めた時に寝室のベットから目に入る景色は？かたく閉じた芽が日に日にふくらみ、みずみずしい新緑、夏の日射しを遮る緑陰、秋の紅葉、冬の枝姿など季節の移り変わりは？さらには道行く人たちの目を楽しませて、街並みが豊かになつたらいいなあ…と思いながら。

思い入れのあるお仕事は？

川崎市の老人ホームの屋上緑化です。里山の子どもたちが育てたどんぐりの苗を里山ユニット(※)で設置し、交流イベントをしました。入居しているおばあさんが、涙をこぼして喜んでくれました。最近では、代官山のビルの屋上緑化などを担当しています。相手の想いを汲み取りながら在来植物のよさをどう提案していくか、課題がいくつもあって途中でやめたいと思う度に「もうひと踏ん張り」と自分に言い聞かせて乗り越えてきました。やってみなければ分からぬことが、まだたくさんあります。

現場に飛び出して行かれますね。

いろいろな人に支えられて、今ここにいる感じます。やればやるほど自分1人でできることはほんのわずかだと。周りのスタッフや資材メーカーの人たち、職人さんたちに育苗ナーセリーや馬頭の森の人たち。大きさでなく、これまで出会った人たちのおかげだと本当に感謝しています。そして気ままで元気な家族にも感謝。

創造の源は何处ですか？

すごく落ち込んだ時、下に向いちやいけないと思って、上を向いたんです。日が昇って沈む毎日の繰り返しの中で、太陽、空、植物にエネルギーが満ちている、と気づきました。彼らの営みは自然の摂理のままにあるだけなのに、ものすごくエネルギーをもらいました。このことと、人も自然の中の仲間・いきものであることを忘れないようにしたい、そんな風に思っています。

※里山の風景を写すことを基本に、在来の植物10~25種類を組み合わせてつくられる。全ての側面に植物を施すことのできる、緑のプランター。



築50年になる古い集合住宅をリノベーションし、異業種のノタチとのシェアオフィスに参画。テラスの里山ユニットが、目のを和ませる。設計をしても、環境との相性によって植物の育ち方が違うのが面白いと玉井さんは言う。「他の生物が種を運んできたり… いのちのつながりを感じます」。



5×緑
(ゴバイミドリ)
同時配布のチラシをご覧ください。